雨の音

宇野千代

文藝春秋

書き下し
特別作品
文藝春秋

雨の音

昭和四十九年三月一日　第一刷
昭和四十九年十月二十五日　第三刷

著者　宇野千代
發行者　樫原雅春
發行所　株式會社　文藝春秋
〒102 東京都千代田區紀尾井町三
印刷所　精興社
製本所　加藤製本
製函　紙パ商事

萬一落丁亂丁の場合はお取替へいたします

© Chiyo Uno 1974　Printed in Japan

雨の音

宇野千代著

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

或る人の受賞式があつて、東京會舘へ行つたときのことである。そとは雨が降つてゐた。老齢になつてからの習慣で、外出するときには誰かについて行つて貰ふのに、そのときは一人であつた。會が濟んで、扉口のところで、ちよつと躊躇して、雨の降つてゐる夜の街を見てゐた。「小母さん、」と誰かが呼んだ。見ると、傍に樋口正夫が立つてゐた。「僕もやはり、五階で會をしてゐたんですよ。」少し酒の這入つた顔をしてゐた。子供のときの通り、頬に靨があつた。「どうしてお前は、そん

なに素直なんだよ、と言はれて、それアお前、子供の頃に、吉野一枝に育てられたからだよつて、いま、つい、さう言つて答へて來たばかりですよ。そしたら、小母さんがそこに、」と言つた。ちやうど三十四五年前の、正夫の父と同じ年頃になつてゐる、と私は思つた。正夫の言葉はそのままほんたうではない。いまの正夫が素直であつても、それは私が正夫を育てたからではない。酒の這入つてゐるせゐもあるが、こんな扉口に立つて、さう言ふ風なことを言ふ正夫の氣持には、ただの世渡りの世辭ではなく、私の氣持に應へたい、と言ふ、或る優しさがある。私はさう思つた。

正夫と會つたのはもう一度、四五年前に、青山の私の家へ正夫が訪ねて來たときのことである。「これでやつと、今夜から安心して眠れますよ。實際、この十五六年の間に、何度電話をかけたか分らない。一體、どう言ふ譯で會つて貰へないのか分らなかつた。」正夫はさう言つた。この言葉の中にある誇張が、このときも、不快には聞えなかつた。それは昔、どこかの男から囁かれた求愛の言葉に似てゐるや

うなのに、それでもなほ、さう不快でなく聞えたのは不思議であつた。

私が正夫の父と一緒の家に住んでゐたのは、いまから三十四五年も前のことである。正夫はあとから來て、そこに一緒に住んだ。正夫は私のことを「小母さん、」と呼んだ。誰がさう呼ばせたのでもないが、自然にさう呼んだ。この呼び方が示してゐるやうに、正夫は私にとつて繼子でさへなく、ただ同じ家の中にゐる他人の子供であつた。そのことは家の中の部屋の配りにも現はれてゐた。正夫の父は家の殆んど半分くらゐを占める大きなアトリエの中にゐたし、私は南向きの書齋にゐた。あとから來た子供のためには部屋がなくて、間に合せに、北向きの納戸のやうなところが當てがはれた。その部屋はちよつと暗かつた。それだのに私は、日當りの好い自分の部屋と、それをとり替へてやつた方が好いとは思はなかつた。

ときどき、正夫の母が來て、泊つて行くことがあつた。正夫の父と母が別れてから、大分たつた頃のことであつた。正夫の部屋から、嬉しさうに燥いでゐる聲がよく聞えた。また、反對に、母が來ないとき、正夫はその暗い納戸で、じつとしてゐ

ることがあつた。行つて見ると、正夫は母が持つて來た縫ひぐるみの熊を抱いて、體をまるめるやうにして泣いてゐた。私の眼に浮ぶのは、その、七つか八つの頃の正夫の姿である。

その正夫が逞しい四十男になつて、ときどき、私の眼の前に姿を見せるやうになつた。母は亡(なくな)つたと言ふ。子供の頃と同じやうに頬に靨のある優しい顏つきが、一瞬、聞くものへの世辭ともとれる言葉をそのまま信じさせる。別れてゐた間はながかつた。私の心の中に殘つてゐた正夫の姿は、いつでも、ひ弱く悲しかつたが、その正夫といまの正夫とは、私の心の中でやはりどこか繫がる。「小母さん、」と言つて、正夫が這入つて來た。千駄ケ谷の驛の近くに家を借りて、ひとりで住んでゐたときのことである。肩から鞄をかけてゐた。學校の歸りに寄つたのであつたが、ここに私が住んでゐることを誰が敎へたのか、いまでは、憶えてゐない。そのときも、正夫の顏は嬉しさうであつた。「應接間に、とても大きな鏡が這入つたんだよ。とても、きれいだよ。」と言つた。その鏡がとても大きくて、とてもきれいなのを、

正夫は私に言ひに寄つたのであつた。

私のゐなくなつたあと、その家には正夫とその父とが殘つた。應接間に鏡が這入つたことを言ひに寄つた子供の氣持は、その鏡を見に、もう一度、家へ戻つて來ないかと言つてゐるらしいのを、そのとき私は感じとつた。しかし、子供の感じてゐることと實際とは違ふ。その鏡は、私に見せるために入れられたものではなかつたから。そして、やはり私と正夫の父とはこのときからほんたうに別れた。男と女の間に、子供が介在したことは、思ひがけないときに影が殘つてゐるものだ。自分自身に子供のなかつた私は、自分の子供ではない子供と一緒に暮すことがあつても、一體に、相手になる男のことには心をとられてゐても、その子供のことに氣持をとられたことがない。ただ、相手の男と一緒にゐる子供、とだけしか考へてはゐなかつた。そのために、この頃になつて、一そう子供の姿が哀れに思ひ出されるのかも知れないが。

2

那須によい土地があると言ふ。値段が安かつた。自分で買ふ氣はなかつたが、人に賴まれてゐたので、見に行くことになつた。去年の秋のことであつた。行つて見ると、そこは私の住んでゐるところとは大分離れてゐた。そこでも那須と言ふのか、と私は思つた。間口が十間で奥行が三十間と言ふ地形で、北向きである。田圃のそばで、何となく、よい土地と言ふ印象ではなかつた。「どうか知らね、」と私は言つた。やめる氣になつて、歸りかけたとき、ふと、立つてゐる足許に、七寸か八寸くらゐの丈の、葉が眞つ赤に紅葉してゐる小さい木が、群生してゐるのに氣がついた。私と、一緒に來た女の子とは、夢中になつてそれを拔いた。三十本も拔いたらうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

車で歸つて來る途中でも、何の木か名前も知れないその紅葉の可憐さに、氣持がわくわくした。

家へ歸ると、早速、鉢に植ゑた。丈の高いのから低いのと、だんだんに揃へて、十四五本を一つの鉢に植ゑた。小さい木なのに、紅葉の林のやうに見える。ほんのちよつと綠色が殘り、黃色が殘り、あとは燃えるやうに紅い。だんだんに秋の深くなつて行くさまを、一と目で見るやうな氣持になる。「吉村のとこへ持つて行かう。」私はふいに思ひついた。

吉村は去年の春から病氣で寢てゐる。しばらく入院してゐたが、その頃には自分の家に戻つて養生してゐた。ながい病氣であつた。病氣のために食べるものに制限があつて、それで食慾をなくしてゐた。見舞ひに持つて行くものと言つては、果物しかなかつた。その吉村にこの紅葉の鉢植ゑを持つて行けば喜ぶに違ひない。さう思つたのであつた。私のやうにこんな高原に家があつて、そこからの歸りに土產に持つて行くには、一番好いものと思はれた。

さうだらうか。何か思ひつくと、あとさきを考へずに、すぐに馳け出して了ふのが私の癖である。紅葉の鉢に霧を吹きつけ、ビニールの袋を大切に冠せたのを持つて、汽車に乗つた。私はこれまで吉村の家へ行つたことはなかつた。赤坂に住んでゐると聞いただけで、それがどんな家か知らなかつた。上野に着いて、青山まで歸る途中で、植木鉢を屆ける積りであつたが、家の前で車をとめ、女の子だけに持たせてやつて、自分は車の中で待つてゐる積りであつた。

なぜ、吉村の家の中へ這入つて行くのがためらはれるのか。世間普通の言ひ方で言へば、別れた男がほかの女と一緒に住んでゐる家へ這入つて行くのは、をかしいことに違ひない。しかし、私がそれをためらつたのは、さう言ふことではなかつた。いつのときでも私は、自分がそのとき、自然に、したいと思ふことだけをするのが癖であつた。家のそとで待つてゐることも、はじめから豫定してゐたことである。そこはマンションであつた。そとの構へを見ても、宜ささうなところであつた。女の子はぢきに出て來た。「どうだつた?」と私は聞いた。

私には、自分が鉢植ゑを見て面白いと思つた氣持が、そのまま吉村にもあるやうに思はれた。「先生はソファの上に横になつていらつしやいました。とても綺麗だと、喜んでいらつしやいました。」女の子はさう言つた。ソファの上に横になつてゐると言ふ吉村の姿が、私の眼に浮ぶ。たぶん、その鉢植ゑは、吉村の眼に見易いところの、棚の上か卓子の上へ置いたことであらう。見たことはないが、その部屋の中も見たやうに思はれる。飾り棚や茶簞笥や瀬戸物の類も、吉村と一緒にゐた間に使つたものがある。そんなものを見て、心を動かされるのを避けたい、と私は思つたのであつた。「おくさまも、先生に宜しく、と幾度も仰言いました。おくさまも、とても盆栽がお好きで、テラスの窓に、たくさん鉢植ゑを列べていらつしやいました。」女の子はさう言つた。

私の家では、吉村やその妻のことを話すのは、決して禁句ではない。私は吉村の妻に、吉村を病院へ見舞ひに行つたときに、一度會つただけであるが、電話で話をすることはしばしばであつた。電話で聞く聲は自然で、とりつくろつた感じがなか

つた。物事をそのままに傳へる彼女の話し方も、私には感じが宜かつた。私とは親と子ほどに年齢が違つてゐたが、私の羨しく思つたのは、彼女のその自然な態度であつた。吉村が病氣になつてからは、吉村に用があるとき、凡て彼女に取り次いで貰つた。このことも、世間普通の習慣とは似てゐなかつたが、しかし、それが當り前のことのやうになつてゐた。

今年の春になつてからのことであつた。彼女からの電話によると、吉村は病氣のせいで體中に出來てゐた濕疹が、このところ、酷くなつて、その痒さのために夜は眠れぬ、とのことであつた。そんなことを聞いても、手を拱いて、私は遠くから見てゐるだけであつた。その間に、うちへ人が來て、その病氣に詳しいと言ふ人から聞いたばかりだ、と言つて話してくれたことによると、「それは老人性濕疹と言つて、皮膚病ではありません。好いことを敎へて上げませう。米糠を袋に入れたものを風呂に入れ、一日に二三度這入るのです。その痒さをとるには、それしかありません。一二ケ月で全治しますよ。」とのことであつた。その話し方に確信があつた。

一二ヶ月で全治しますよ。と言ふ言葉まで傳へて、私は彼女に電話をした。

をかしなことであるが、私の家にゐる女の子たちは、どの子も吉村のことを氣にかけてゐた。吉村が私と一緒にゐた頃から、私のところにゐた女の子のひとりが、「先生、うちで袋を縫つて上げませうよ。糠も入れて、屆けて上げませうよ。」と言つた。そして、女の子たちの手で、見る間に袋が出來、吉村の家まで屆けに行つたのであつた。

他人が聞いたら、これもをかしいことかも知れない。主人である私の氣持のせゐで、女の子たちがさうなつた、のとも違ふ、何かがあつて、吉村のことをするのであつた。しかし、そのことは、私にも、氣の樂なことであつた。そして、家中で、極く自然に、吉村のことを親しい家の人としてつき合ふのが、習慣になつてゐた。

糠袋を屆けてから二三日して、私の方から電話をした。糠袋の效果がどうであつたか、知らせがあるまで待てなかつた。「糠袋、どうだつたでせう。」「とても具合が好いさうです。體中がすべすべして、痒味(かゆみ)がとれるのが分るやうな氣がするつて、

言つてゐます。」「まア宜かつた。」そのとき、私はもう一度、一二ケ月で全治しますよ、と言つてゐた人の言葉を思ひ出した。すると、續けて彼女が言つた。「私も這入つて見ましたが、とても氣持が好いんです。」それを聞いた瞬間、私が何を思つたか、どきつとして、そのことは自分でも信じられないことであつた。糠袋の風呂に彼女が這入つたと聞いた瞬間、私の眼に、吉村と彼女が一緒に風呂に這入つてゐるさまが、はつと思ひ浮んだのであつた。そんなことがあり得ようか。吉村と彼女が一緒に風呂に這入つたと知つて、それで氣持がどきつとしたなぞと言へるだらうか。別れて七八年も經つて、普通の男女の間よりも、もつとさばさばしてゐると信じてゐた自分の氣持の中に、こんなものがあるなどと、どうして思へよう。しかし、本人の自分が思へなくても、確かにそれを感じたのは、私の氣持のどこかに、嫉妬の原型のやうなものがひそんでゐて、自分の心の中で、幻のもののやうに見えたのであつたか。

私はしかし、そんな幻のこともぢきに忘れた。どんなことがあつても、いつの間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com